

比喩の語用論(2)

主要な語用理論から見た隠喩理論

村 越 行 雄

序

古代ギリシャ時代にまで遡ることのできる比喩理論の歴史は、J.L. Austin の言語行為論(1962)、John R. Searle の言語行為論(1969)、H. P. Grice の含意理論(1975)、そして Dan Sperber and Deirdre Wilson の関連性理論(1986)が出現し、語用論の中核を成す言語理論として地位を確立したことで、そしてそうした言語理論に基づく比喩理論が台頭したことで、新たな時代に突入したと言える。そのことは従来大きな影響力を持っていた意味論的な取り組み方に代わるものとして、新たな視点からの語用論的な取り組み方が比喩との様々な係わりの中で現われてきていることでも明らかである。そこで、特に隠喩に対する語用論的な取り組み方に焦点を合わせて、Searle、Grice、そして Sperber and Wilson の語用理論において隠喩がどのように捉えられているのかを明確にし、隠喩の意味を解明する為に、「語用論と隠喩理論」、「Searle による隠喩理論」、「Grice 的な隠喩理論」、「関連性理論に基づく隠喩理論」、「隠喩の意味」という順序で、Searle の “Metaphor” (1979)、A. P. Martinich の “A Theory for Metaphor” (1984)、そして Sperber and Wilson の “Loose Talk” (1986) の三論文を具体的に比較検討することにする。なお、「語用論と隠喩理論」、「Searle による隠喩理論」、そして「Grice 的な隠喩理論」については、すでに「比喩の語用論(1)」(『跡見英文学』第六号, 1993)において論じたので、本稿では残りの「関連性理論に基づく隠喩理論」と「隠喩の意味」について論じていくことにする。

関連性理論に基づく隠喩理論

Relevance: Communication and Cognition (1986)で示された関連性理論を基礎に置いている Sperber and Wilson の隠喩理論は、Searle の隠喩理論と Martinich の隠喩理論からはっきりと区別できるもので、その相違を明らかにする必要上、「関連性理論に基づく隠喩理論」でも、Searle、Martinich、そして Sperber and Wilson の比較を加味しながら

ら検討を加えていくことにする。

まず“Loose Talk”の冒頭で、字義どおりの話、厳密さを欠く不正確な話(loose talk)、そして隠喩的話は、種類の相違として見られることがよくあるが、単なる不正確さの程度の相違にすぎず、本質的には同じ方法で理解されるべきものであり、関連性の原則に基づいて説明されるべきものであると述べ、それから問題提起をする。基本的には、隠喩（あるいは、比喩一般）に関する古典的説明とロマン派的説明の対比が主に二つの点に関して行なわれるのであるが、ロマン派的な取り組み方に肩を持った形で対比となっている。

第一は、隠喩の性格付けについてである。古典的修辞学による説明に従えば、例えば、

(1) Mother to child: You're a piglet.

(2) He is a dirty child.

の場合、母親は自らの発話(1)の文字どおりの意味が真実であることを主張しているのではなく、(2)のような命題が真実であることを証明しようとする訳で、従って文字どおりの意味という規範からの逸脱として隠喩が捉えられ、(1)の文字どおりの意味に代わるものとして(2)のような隠喩の意味があることになる。そして、同様の説明は Grice にも見られるとされている。Grice の場合も、真実性の公理（これは質の第一公理を指す）の遵守という規範からの逸脱として隠喩が捉えられ、古典的修辞学の伝統を引き継ぐ結果になり、例えば、母親が(1)を正直に、しかも文字どおりに主張しようとする意図を持っている訳ではないという事実から、子供は母親が(2)を含意しているに違いないと推論することになるのである。以上のように、古典的修辞学において隠喩の意味として扱われているものが、Grice によって含意として再分析されるにすぎず、文字どおりの解釈が妥当でない時は、聞き手が妥当な隠喩的解釈をすることになるという点で、両者とも共通しており、結局文字どおりの意味の真実性という規範（規則、原則、公理、慣習、想定）からの逸脱として隠喩が捉えられるのである。しかし、古典的修辞学に対するロマン派の批判に見られるように、日常的な談話は、隠喩で満ち溢れているのであり、隠喩とは、決してそのような規範から逸脱しているものではなく、ごく自然で、一般的なものであるとしてロマン派的取り組み方を受け入れるのである。

第二は、言い替えについてである。隠喩は文字どおりの厳密な言い替えが可能であるとする古典的意見（Grice を含めて、多くの現代の語用論者も同様である）に対して、適切な隠喩は言い替えができないとロマン派は主張する。そうした主張も基本的には受け入れるとしている。例えば、自分の子供を a piglet と呼ぶことで、母親は a dirty child と呼ぶ時よりも甘やかし、大目に見るという具合に、言い替えのできない効果をもたらすことになり、話し手は自らの複雑な考えを聞き手に伝えようとするのである。しかし、話し手は聞き手にその複雑な考えを細部にいたるまで正確に心に抱くよう期待している訳ではなく、聞き手にまず最も顕著な命題（複雑な考えを表わす多くの命題の内の最も顕著な命題(2)）を心に抱いてもらい、そしてそれを中心にして話し手の抱いている複雑な考えと似たようなものを組み立ててもらおうよう話し手が意図するのであり、従って母親は子供にまずはっきりと(2)を理解してもらい、そしてそれに付随する考えに少なくとも気付いてほしいのである。以上の意味で、隠喩は文字どおりの厳密な言い替えができなくなるのである。しかし、そうした言い替えのできない隠喩の効果の重要性に注意を向けたという点では、ロマン派は正しかったが、隠喩をただ隠喩として語ることで満足してしまい、それ以上には分析を行わず、明確に理論として発展させなかったという点では、ロマン派に欠陥があるとし、また古典的修辞学者と現代の語用論者はそうした隠喩の効果に気付きはしたが、検討を加えることもなく、取るに足らない些細な飾りにすぎないとして無視したとしている。

以上のような問題意識を持って、古典的取り組み方とも、またロマン派的取り組み方とも異なる理論を概説するのが目的であると Sperber and Wilson は言うのである。そうした意味から言えば、Sperber and Wilson の批判対象である古典的取り組み方の中には、Grice は勿論のこと、Martinich と Searle の隠喩理論も含まれることになるであろう（Sperber and Wilson が Searle と Martinich を直接批判している訳では勿論ないが）。

例えば、隠喩を見分ける際の判断基準に関して、Martinich が全てのケースに当てはめられるものとして誤謬性を挙げ、また Searle が最も一般的なものとして欠陥性を挙げるという具合に、両者とも発話の文字どおりの意味の真実性という規範からの逸脱として隠喩を捉えていると言

えよう（つまり、話し手の発話を文字どおりの意味に解釈すれば、真実ではなく、誤りになってしまう為、あるいは誤りであると考えざるをえなくなる為、その誤謬性・欠陥性を根拠にして聞き手はその発話を文字どおりに解釈することができないと判断し、従って隠喩的発話であると判断し、隠喩的解釈を行なうのである）。それに対して、ロマン派的取り組み方に肩を持つ Sperber and Wilson は、そうした隠喩の捉え方の根底には、文字どおりの意味に解釈すれば、真実になるような発話が言語使用における一般的で、標準的なものであるという信念が存在し、従って隠喩が一般的で、標準的な言語使用から逸脱し、反するものであるという信念が存在するとして、そのような信念に抵抗するのである。また、Searle は厳密な意味での言い替えができないことを主張しながらも、あくまでもできる範囲で文の形で言い替えようとし、Martinich は言い替えのできない不確定要素を認めながらも、不確定要素までも文の中で示す形で全て言い替えようとしているが、両者とも十分な検討を加えているとは言いがたい。それに対して、Sperber and Wilson は従来無視・軽視されてきた言い替えのできない部分を積極的に取り上げ、それこそが隠喩の持つ重要な効果であるとして隠喩理論の中心に据えるのである。

Sperber and Wilson の隠喩理論を調べていくことにする。まず最初に、類似性がある。言語コミュニケーションにおける全ての発話は、話し手が心に抱く考え（話し手が聞き手に伝えようと意図する考え）を表すものとしてあり、従って話し手の発話（または、その発話によって表される命題）と話し手の考えの間には何らかの類似性が存在しなければならないことになる。それが解釈的類似性（interpretive resemblance）と呼ばれる。解釈的類似性についてももう少し詳しく言うと、次のようになる。

In a context {C}, a proposition P may have what we call *contextual implications*. A contextual implication of P in the context {C} is a proposition implied neither by {C} alone, nor by P alone, but by the union of {C} and P. We will say that two propositions P and Q (and, by extension, two representations with P and Q as their propositional content) interpretively resemble one another in a context {C} to the extent that they share their analytic and contextual

implications in the context {C}.⁽²⁶⁾

ある文脈(context)で二つの命題がそれぞれの含意(文脈含意:命題と文脈の双方によって含意される命題のことで、例えば、ある文脈で命題 “It is winter” によって命題 “It is cold” が含意される。分析的含意:命題の分析を通して得られる命題のことで、例えば、命題 “It is freezing cold” によって命題 “It is cold” が含意される)を共有できる限りにおいて、あくまでもその文脈で二つの命題が互いに解釈上類似すると言える(解釈上とするのは、事実を記述するのとは異なり、含意は解釈によってしか分らないからである)のであり、また解釈的類似性は文脈に依存する為、二つの命題の類似性がある文脈では高く、ある文脈では低く、ある文脈では全くないことになる。従って、解釈的類似性は、全く類似性のないもの(共有する含意が全くない場合)と命題が同一のものという両極端の間に幅を持つ相対的な概念であり、その解釈的類似性を話し手の発話と話し手の考えの関係に当てはめることにより、字義どおりの発話、厳密さを欠く不正確な発話、そして隠喩的発話が、それぞれ解釈的類似性の例であることが明らかになってくる。

次に、関連性がある。関連性という相対的な概念が努力と効果の関係で説明されるが、その関係とは、効果が大きくなればなるほど、関連性が大きくなり、また努力が大きくなればなるほど、関連性が小さくなるという関係で、最小限の努力で最大限の効果を上げることで最大限の関連性を求めるのが人間であるということになる。そして、話し手が何かを伝える時、聞き手の注意を引かなければコミュニケーションは成立しないが、人は自分に十分関連のあるものを得られると期待できない限り、注意を払わない為、聞き手が注意を払うだけの価値のある関連性を持った発話を話し手はしなければならず、従って話し手の発話はそれ自体すでに聞き手にとって関連性のある発話のはずで、それが関連性の原則ということになる。つまり、話し手は関連性のある発話をし、聞き手はその発話を関連性のあるものとして捉え、解釈することになり、その際の関連性とは、聞き手にとって最小限の努力で十分な効果を得るものでなければならぬことになる。

以上の関連性と解釈的類似性という基本的な概念を使用しながら、まず厳密さを欠く不正確な話を分析していく。例えば、パリ市の境界線から1ブロックしか離れていないところに住む Marie が、ロンドンのパー

ティーで Peter に住んでいる場所を聞かれて、もし

(3) I live in Paris.

と答えた場合、Marie の返答を文字どおりに受け取れば、誤りであるが、しかし誤解を招くことはないであろう。ところが、もし

(4) I live near Paris.

と答えた場合、Marie の返答を文字どおりに受け取れば、真実であるが、しかし誤解を招く危険性があるであろう。

(3)の場合、彼は彼女がパリをよく知っていること、都会生活を送っていること、パリでほとんどの時間を過ごしていることなどを推論するであろうし、それらは彼女が伝えようと考えているもので、その意味で、彼女の考えと彼女の発話(3)が類似することになり、また彼はある程度の努力で十分な効果を得ることができる訳で、彼女の発話が彼の注意を引くのに十分なほど関連性があることを示すものと言える。(4)の場合、彼はたぶん彼女が郊外で生活していること、パリに行くにはだいたい時間がかかることなどを推論するであろうが、それらは彼女が伝えようと考えているものではなく、その意味で、彼女の考えと彼女の発話(4)が類似しなくなり、また彼女の考えを解釈し、理解する為には、彼はかなりの努力を払いながら効果をほとんど得ないことになり、彼女の発話が彼にとって十分関連性があるものとは言えなくなってしまう。そのように考えると、発話の文字どおりの意味の真実性とは関係なしに、関連性と解釈的類似性に関して言う限り、(4)よりも(3)の方が彼女の考えを効果的に伝えるものとなり、従って彼女は(3)を発話することになる。

更に、隠喩の分析を行なう。不正確な話と同様に、隠喩も話し手の発話（発話で表される命題）と話し手の考えの解釈的類似性によって説明され、また隠喩以外の様々な比喩も同様に説明されるとしている。なお、Sperber and Wilson は、不正確な話と隠喩の中間に位置すると考えられる誇張の例を分析し、それを隠喩に当てはめていくのであるが、ここでは誇張の分析方法をそのまま隠喩の分析方法として述べていくことにする。

(5) Jeremy is a lion.

(6) Jeremy is brave.

ある特定の文脈で話し手が(5)を発話する時、話し手はその発話によって自らの考えを聞き手に伝えようとするのである。仮に直接(6)を言うと

すれば、話し手は Jeremy に対する自分の考えを全て表し尽くすことにはならず、つまり(6)の含意するものが話し手の伝えようと考えているものの一部を成すにすぎず、たとえ副詞や形容詞を様々に組み合わせても自分の考えを正確に表すことにはならなくなってしまう。それに対して、(5)を言えば、話し手が伝えようと望んでいる考えの全てが(5)によって含意されるものの中に含まれると確信するのであり、だからこそ話し手は(5)を言うのであり、それによって自分の考えを十分表せると思うのである。勿論、(5)によって含意されるものの中には、話し手が伝えようとするもの以外のものも当然含まれてしまうが、ただ(6)よりも(5)の方が話し手の考えを表すのにより適していると思われるからである。

そこで、話し手の発話（発話で表される命題）(5)と話し手の考え（考えは複雑で、様々な命題から構成されていると言え、従って考えを構成する全命題）の解釈的類似性を見ると、(5)は確かに(6)を含意するが、もし話し手が伝えようと考えているものが単に(6)だけであるならば、聞き手が発話解釈の為に払う努力が大きい割に、得る効果が少なく、聞き手にとっては関連性が十分あるとは言いがたく、そうであるならば直接(6)を発話する方が聞き手の発話解釈の努力を軽減させることになるが、(6)ではなく、(5)を発話する以上、(5)は聞き手にとって十分関連性がある訳で、従って(5)は単に(6)だけでなく、それ以外のものも含意していることになる。結局、(5)を発話することで一連の文脈含意（(6)がその発話の核を成すものとして強い含意と呼ばれ、それ以外が弱い含意と呼ばれる）を伝えることになり、別の言い方をすれば、一連の命題（(6)が顕著な命題となり、それ以外は顕著でない命題になる）を伝えることになり、そしてそれが話し手の複雑な考えと類似することになるのである。話し手の発話と話し手の考えが類似するということは、発話で表される命題が聞き手に伝える一連の命題と、考えを構成する一連の命題が類似することとで、つまり命題“Jeremy is a lion”が聞き手に伝える一連の命題（“Jeremy is brave”+その他多くの命題）と Jeremy に対する考えを構成する一連の命題（“Jeremy is brave”+その他多くの命題）が類似することである。以上のように、単一の表現が強い含意だけでなく、非常に広い範囲の弱い含意も決定してしまう訳で、従って隠喩は極度に圧縮した表現であると言え、その隠喩を言い替えることは不可能であると言える。

最後に、Sperber and Wilson 自身の取り組み方を古典的説明とロマン派的説明に比較して、次のように述べている。ロマン派の主張を基本的に受け入れる立場で、隠喩は決してコミュニケーションの規則・公理の違反あるいは規範からの逸脱ではなく、全ての発話が話し手の考えと類似するという言語コミュニケーションの基本的性質を単に利用しているだけで、ごく自然で、一般的な心理的メカニズムに基づくものであり、また古典的修辞学によって単なる飾りとされたものは、実はきちんと認識されるべき真の内容を持つもので、不定数の弱い含意から成り、言い替えのできないものとして捉えられるべきものであるとしている。ロマン派の主張に反対する立場で、厳密さを欠く不正確な用法があるということは、言語が改善不可能なほど曖昧であることを意味する訳ではなく、また隠喩で満ち溢れているということは、隠喩が語そして文の意味の一側面を成すにすぎないものであると言っている訳ではないとしている。そして、Sperber and Wilson の主張は、一般的に聞き手が発話に接する時、その発話の文字どおりの意味、不正確さ、あるいは隠喩的性格などに関して固定的な期待を持って接する訳では決してなく、聞き手はただ発話で表される命題と話し手が伝えようと意図する考えの間に解釈的類似性があることを単に期待するにすぎず、その聞き手の期待は、より基本的な期待、つまり関連性があるという期待によって裏付けされるということを明らかにすることであるとしている。

以上の Sperber and Wilson の隠喩理論の特徴は、全ての話し手の発話が、聞き手にとって最小限の努力で十分な効果を得るのに足るだけの関連性を持つものであること、そして全ての話し手の発話が、話し手が聞き手に伝える意図で心に抱く考えを表すものとしてその考えに類似していることを大前提にし、そうした前提の下で全ての発話（字義どおりの発話、厳密さを欠く不正確な発話、隠喩的発話、それ以外の比喩的発話など）が質的相違ではなく、あくまでも単なる量的相違によって区別されるにすぎないとして同一方法で分析され、そうした一貫性を持つことにあると言える。そして、一貫性という意味では、会話の公理と三段論法的推論形式を一貫して適用する Martinich の隠喩理論と対比できる。しかも、単に隠喩だけでなく、その他の発話形態にも適用される訳であるから、彼らの相違はより一層鮮明になる。しかし、Grice の含意理論における協調の原則と会話の公理（量の公理、質の公理、関連性の公

理、様式の公理の四公理)に基づく Martinich の隠喩理論と、Grice の含意理論を批判・発展させて確立された関連性理論に基づく Sperber and Wilson の隠喩理論を対比して、彼らの理論の正当性を判断する為には、どうしてもその基になっている Grice の含意理論と Sperber and Wilson の関連性理論の正当性を問題にしなければ決められないが、ここではその問題は取り上げないことにして、あくまでも隠喩に関する主張のみに限定することにする。

Martinich の隠喩理論と Sperber and Wilson の隠喩理論が共に Grice の含意理論から派生してできた理論(前者が肯定的に受け入れる立場で、Grice の協調の原則と会話の公理を利用するのに対して、後者が批判的に乗り越えようとしながらも、基本的にはその意義を認める立場で、それらを関連性の原則一本にまとめる)ということもあり、協調の原則と関連性の原則のそれぞれを土台にして、例えば、会話における話し手と聞き手の協調関係を根本前提とする Martinich と話し手の発話が聞き手にとって関連性があることを根本前提にする Sperber and Wilson という具合に、共通した大枠がはめられ、そしてあくまでもその枠の内において、会話の公理の違反として捉える Martinich (標準的隠喩の場合は、質の第一公理の違反で、非標準的隠喩の場合は、その他の会話の公理の違反)に対して、話し手の発話と話し手の考えの解釈的類似性として捉える Sperber and Wilson があると言え、そこに彼らの明確な相違点が見られると考えていいであろう。つまり、協調の原則であれ、また関連性の原則であれ、ともかくそうした原則に違反せずに、遵守することが根本前提で、それなしには言語コミュニケーションそのものが成り立たなくなるのであるから、当然彼らにとっても共通した枠がはめられる訳で、その根本原則によってはめられる共通の枠内で、隠喩を会話の公理の違反として捉えるのか、それとも話し手の発話と話し手の考えの解釈的類似性として捉えるのかという相違が生まれてくると言えるのである。従って、根本原則とその次に位置する会話の公理の違反あるいは解釈的類似性を一応分けて考えるとすれば(勿論、後者は前者と深く係わっているので、単純に切り離すのは危険であろうが)、前者に関して言えば、彼らの主張には共通性があると言え、また Searle にしても、そうした根本原則を当然認めていると言えるであろう。そして、あくまでも前者に関して言えば、Sperber and Wilson が主張するように、

遵守したり、違反したりするものではなく、単に言語コミュニケーションの基本的性質にすぎないとするのも構わないであろうし、また遵守すべきものとするのも構わないであろうし、要は言語コミュニケーションの基本的性質であることを認識することで、そうした認識は Searle にしても、Martinich にしても、更に Sperber and Wilson にしても、共通して持っていると言える。しかし、Sperber and Wilson は、後者にも言語コミュニケーションの基本的性質にすぎないとして、遵守したり、違反したりするものではないと主張するのである。それに反して、Martinich は、Grice と同様に、会話の公理の違反とするのである（根本原則である協調の原則は遵守されるべくものであるが、会話の公理は遵守されたり、違反されたりするものであると Grice は主張し、Martinich はそれを基本的には受け入れるが、協調の原則についてはごく簡単に触れている程度で、それは隠喩のみを分析している為であろう）。いずれにせよ、Sperber and Wilson が関連性の原則も解釈的類似性も言語コミュニケーションの基本的性質であるとし、基本的性質であるが故に、遵守したり、違反したりするものであるべきでないとするのに対して、Grice が協調の原則も会話の公理も言語コミュニケーションの基本的性質であるとし、むしろ協調の原則は遵守されるべきであるが、会話の四公理は様々な形で遵守されたり、違反されたりしながら実際の日常的な言語コミュニケーションが成り立っているとするのであり、そうした認識に基づいて Grice と Martinich が隠喩を会話の公理の違反として捉えるのである。

そこで、隠喩の捉え方（隠喩の見分け方）に関する会話の公理の違反と解釈的類似性の相違を調べることにする。聞き手が発話に接する時、Martinich と Searle（原則・公理の違反という言い方をしていないが、一応 Martinich と同様に扱うことにする）によれば、まずその発話が隠喩的発話なのかどうかを見分けなければならず、そうしなければ誤解してしまうからで、その為に文字どおりに解釈してみても、もし誤りであれば、隠喩的発話と判断できることになり、それから推論していくことになるが、Sperber and Wilson によれば、隠喩的発話であるかどうかを見分けようと思って接する訳ではなく、その発話と話し手の考えが類似していると期待し、それで推論していくことになる。ところが、協調の原則であれ、関連性の原則であれ、何であれ、言語コミュニケーションの成

立の為の絶対必要条件として、話し手の発話は話し手が聞き手に伝えようと意図する考えを表すものとしてあり、密接に結び付いていること、そして話し手の発話は聞き手にとって関連のあるものであることは前提にされているのであり、従って Martinich と Searle の場合にしても、話し手の発話と話し手の考えが類似していると聞き手が期待するのは当然の事であろう。隠喩的発話であるかどうかを見分けるのは、むしろ次の段階に来るものであって、そこを Martinich と Searle が問題にしたと考えることができよう。単純な隠喩の例であればいいが、判断しにくい例であれば、誤解を避ける為には、なおさら見分ける必要性が大きくなるであろう。それはともかくとして、発話解釈の際の聞き手の心理過程は、厳密に言えば、(1)話し手の発話が話し手の考えを表すものであること、そして話し手の発話が聞き手にとって関連性があることを期待すること、(2)話し手の発話を隠喩的発話であるのか、それともその他の発話であるのかを見分け、判断すること、(3)隠喩的発話を通して話し手の考えを推論して、理解すること、の三段階を少なくとも含むものであると言えよう。人々はごく当然の事として日常的に余り意識しない為に、欠落する段階があるように感じられるであろうが、基本的にはそれらの三段階が存在すると考えられる。

それら三段階を使用して対比すれば、Martinich と Searle が(2)と(3)の関係を問題にするのに対して、Sperber and Wilson が(1)と(3)の関係を問題にするとと言えるが、前者は(1)を当然あるべき根本前提として省略したと考えれば、結局は(1)と(2)と(3)の関係を頭に描いていると言えよう。いずれにせよ、Martinich と Searle にとっては、(3)へ到達する為には、(2)を経なければならないとされるが(話し手の発話が隠喩的発話であるのか、それとも他の発話形態なのかをまず最初に判断しなければ、その発話の解釈ができない)、Sperber and Wilson にとっては、(1)における解釈的類似性によって、直接(3)に到達できるとされる(話し手の発話と話し手の考えが類似していると期待できれば、後はいかに類似しているかを推論するだけ)のであるから、聞き手が(3)に到達するには、(2)を経る必要があるかどうかの判断が重要となる。例えば、“John is a nice person”と“John is a pig”の発話に聞き手が接する時、ごく一般的な文脈では前者が字義どおりの発話で、後者が隠喩的発話であるが、Sperber and Wilson によれば、聞き手はどのような発話形態であるのか全く気に

掛けずに、話し手の発話と話し手の考えが類似していると期待して、いきなりいかに類似しているかを推論することになる。しかし、聞き手はジョンが良い人間であることを知っているから、前者を字義どおりの発話と判断し、またジョンが豚でないことを知っているから、文字どおりに解釈すれば、誤りであることが分かっており、だから後者を隠喩的発話と判断するのであろう（もしジョンという名の豚を指していることを知っているのであれば、字義どおりの発話と判断するであろう）。従って、聞き手の発話解釈には(1)だけでなく、(2)も自動的に含まれるであり、基本的には三段階が存在すると言っていいであろう。たとえ Sperber and Wilson の主張を受け入れて、仮に(2)が必要でないとしても、我々は発話形態を何らかの形で区別しなければならず、その際彼らの言う解釈的類似性による区別が可能であるのかが問題になろう。質的ではなく、あくまでも単なる量的区別とされるが、話し手の発話と話し手の考えがどの程度類似しているのかを量的に判断できるのであろうか、それによって隠喩的発話であるかどうかを判断できるのであろうか。類似性の程度という量的基準だけで、様々な発話形態を区別できるとは考えにくく、従って何らかの判断基準が必要になってくるであろう。そこで、Martinich のような徹底した会話の公理の違反という判断基準が最善であるかどうかは疑わしいかもしれないが、少なくとも Searle の言うように、唯一絶対なものではなくても、最も一般的に考えられるのが、欠陥性という判断基準であり、そしてその他にも様々あるという言い方も可能であると言えよう。

次に、隠喩の意味の理解（言い替え）に関する Searle の推論、Martinich の推論、そして解釈的類似性の相違を見てみることにする。つまり、上記の(3)が問題になる。隠喩理論にとっては、隠喩の意味（発話を通して、話し手が聞き手に伝えようと意図する考え）を理解することが最終目標になるが、その際の聞き手側の発話解釈における推論形式をどのように捉えるかが重要となる。Searle の場合、“S is P”（隠喩文）→ P—R（聞き手の信念）→ “S is R”（言い替え文）という推論形式が取られ、その間の推論過程は、P の顕著な性質の範囲が設定され、それが R になりえる候補者の範囲となり、それが S によって制限され、それで R が決定するという具合に、P から R へと辿り付く為の制限過程となっている。Martinich の場合、“S is P”（第一前提）→ “P is R”（第二前提

あるいは大前提) → “S is R” (結論) という三段論法的推論形式が取られ、その間の推論過程は、顕著さの原則によってPの顕著な性質の範囲が設定され、関連性の原則によってそのPの顕著な性質の範囲が狭められ、真の結論への貢献の原則によってそのPの顕著な性質の範囲が更に狭められ、それで“P is R”が得られるという具合に、Pから“P is R”へと辿り付く為の制限過程になっている。Searle と Martinich に共通なことは、推論過程がPの性質の範囲を次第に狭めていき、それを通してRあるいは“P is R”を絞り出す制限過程としてあり、最終的には“S is R”を導き出すことである。

そうした推論とは明らかに異なるのが Sperber and Wilson である。関連性の原則を根本前提にして、話し手の発話と話し手の複雑な考えの類似性を聞き手は期待し、その上で話し手の発話を通して話し手の複雑な考えを推論していくことになる。その際の聞き手の推論過程の特徴は、話し手の発話で表される命題が聞き手に伝える一連の命題の内、まず最初に顕著な命題を心に抱き、次にその命題を中心にして話し手の複雑な考えと類似するようなものを自ら組み立てていくことであり、別の言い方をすれば、話し手の発話で表される命題が様々に含意するもの(含意)の内、特に強く含意するもの(強い含意)をまず最初に心に抱き、次にその強い含意を中心にしなが、その他に含意する様々なもの(弱い含意)をまとめて、話し手の複雑な考えと類似するものを聞き手自ら組み立てていくことである。そうした意味で、隠喩は話し手の複雑な考えを極度に圧縮した言語表現で、その言語表現を聞き手が膨らまして、類似する複雑な考えを組み立てる訳で、隠喩を間に挟む圧縮(話し手側)と膨張(聞き手側)の過程であると言っていいであろう。

以上の彼らの相違は、隠喩で使用される文“S is P”におけるPの性質の範囲を次第に狭めていく制限過程を通して“S is R”を導き出す Searle と Martinich に対して、隠喩で表される命題に圧縮されている話し手の複雑な考えをその命題の含意(強い含意+広い範囲の弱い含意)によって組み立て、膨らましていく圧縮・膨張の過程を通して話し手の複雑な考えと類似するものを聞き手が心に抱くとする Sperber and Wilson が対比される点にある。そして、最終的に到達する文“S is R”と聞き手が心に抱く話し手の複雑な考えと類似するもの(あるいは、一連の命題)の相違は、例えば、隠喩が持つ不確定要素を取り入れようとする

時、Pの顕著な性質を表す為に形容詞、副詞などを組み合わせ、しかも or と...を含む文にする Martinich に対して、強い含意（一つあるいは複数）と広い範囲の弱い含意（数は不定）の組み合わせとする Sperber and Wilson が対比される結果につながるのである。そこで、前述したことを考え合わせれば、言い替えの問題に対する Searle、Martinich、そして Sperber and Wilson の取り組み方の相違が明らかになると思うが、あくまでもその問題に関して言えば、勿論他の問題は別にしてであるが、Sperber and Wilson の主張には説得力があるように思われる。というのは、Searle と Martinich の場合、厳密に言い替えることのできない不確定要素の存在を認めている点では、評価できると言えるのであるが、十分な検討がなされたとは言いがたく、特に上記の Martinich の解決策は、十分納得のいくものとは思えないからである。ところが、Sperber and Wilson の場合、強い含意と広い範囲の弱い含意の組み合わせとすることで、弱い含意の果たす役割を重視し、その弱い含意の存在が言い替えを不可能にさせるとし、また文の中の述語における形容詞、副詞などの組み合わせとしてではなく、顕著な命題とそうでない命題を含む一連の命題とすることで、複数の命題の係わりを重視し、そのことが言い替えを不可能にさせるとし、そうした言い替えのできない要素を多く隠喩が持つが故に、どうしても隠喩を使用せざるをえないことになると説明するのである。そうした説明は、少なくとも Searle と Martinich の説明よりも説得力があると言えるであろう。なお、言い替えの問題は、次で再び取り上げることにする。

隠喩の意味

隠喩の意味を理解することは、話し手が聞き手に伝えようと意図する考えを理解することであるが、字義どおりの発話のように、発話で使われる文の意味が分かれば、それで発話の意味も理解できるという具合にはいかず、そこでその意味を明らかにする為に、何らかの形で別の言葉に言い替えることができればと期待するが、簡単には行かない。しかし、言い替えができないと即断し、隠喩は隠喩で、それ以上分析・検討できないとして片付ける訳にもいかない。そこで、隠喩における言い替えのできない部分をどのように説明するかが問題となる。その問題を明らかにする為に、すでに述べてきた Searle、Martinich、そして Sperber

and Wilson のそれぞれの取り組み方の相違をここで再び検討してみることにする。なお、彼らの推論過程についてはすでに明らかにしてきたので、それらの検討成果をあくまでも前提にして、ここでは言い替えの問題に直接関係するものだけを対象にする。

Searle は隠喩を厳密に言い替えることが本質的には無理であると主張しながらも、できる範囲で実際に言い替えを行なっており、その際“S is a, b, c, and so on” という文形式（ただし、彼の原則 1 のような場合は、「巨人」が定義上「大きい」であるとして、発話“Sam is a giant”が隠喩的に“Sam is big”を意味するとしている）を使用し、そして Martinich は隠喩を一般的には曖昧で、不確定的であるとするが、不確定要素までも文の中に取り入れる形で、全ての隠喩を“S is a, or b, or c, ...” という文形式（ただし、発話“Mary is a block of ice”から“Mary is cold”を導き出す例もある）に言い替えるのである。両者の共通点は、“S is R” という文形式にある。それに対して、Sperber and Wilson は隠喩を言い替えることができないと主張し、実際に厳密な言い替えも、厳密でない言い替えもしていないのである。従って、厳密に言い替えることができないと言っても、彼らの解釈の仕方と取り組み方には相違が出てくる。例えば、Searle の場合、できる範囲で“S is a, b, c, and so on” という文形式（“S is a” という文形式もある）に言い替えるが、厳密に言い替えることのできない隠喩は、具体的に分析・検討されないままであり、Martinich の場合、“S is a, or b, or c, ...” という文形式（“S is a” という文形式もある）における or と... が、厳密に言い替えることができないことを示すものであるとし、その形式を全ての隠喩に適用しようとするが、十分な分析・検討までには至らず、そして Sperber and Wilson の場合、むしろ言い替え不可能性にこそ隠喩の重要性があるとし、含意の中の弱い含意を言い替えることのできない部分として具体的に分析・検討していくという具合である。

最初に、混乱を避ける為に、記号について述べておくことにする。S、P、R のそれぞれは語（その指示物）を、 s^1 は S の性質を、 p^1 は P の性質を、a、b、c のそれぞれは述語における語（性質など）を、S は話し手を、H は聞き手を、P は話し手の発話で表される命題を、 P_1 は命題を、（ ）は性質の集合を、そして { } は命題の集合を、それぞれ示すものとする。以上の記号を使用して、Searle、Martinich、そして Sperber

and Wilson を比較すると、次のようになる。

- (1) Searle: “S is R” = “S is a, b, c, and so on” (ただし、“S is a” もある)
- (2) Martinich: “S is R” = “S is a, or b, or c, ...” (ただし、“S is a” もある)
- (3) Searleの修正・発展: $S(s^1, s^2, s^3, \dots, s^n)$ と $P(p^1, p^2, p^3, \dots, p^n)$ の関係
- (4) Sperber and Wilson: $S \{P_1 \dots P_n\} \div P \div H \{P_1 \dots P_n\}$

(1)は言い替えが可能な範囲での言い替えの文形式で、その以外の厳密な意味での言い替えができないものは除外され、(1)の形式で表すことができなくなるが、ただ and so on が厳密な意味での言い替え不可能性(文中に顕著な性質を幾つ入れるべきかが不確定な為、厳密には言い替えができなくなる)を表すものであると受け取ることができる。ともかく、Searle の場合、厳密な意味での言い替えが可能なもの、厳密ではないが、言い替えが可能なもの、そして厳密な意味での言い替えが不可能なものを区別して考えれば、一番目が“S is a”という形式で、そして二番目が“S is a, b, c, and so on”という形式で表され、三番目は直接分析・検討の対象になっていないと理解していいであろう。(2)は全ての隠喩に適用される文形式で、or と...が厳密な意味での言い替え不可能性(文中に顕著な性質を幾つ入れるべきか、また文中に入っている顕著な性質の内、どれが話し手によって意図されるものなのかなどが不確定な為、厳密には言い替えができなくなる)を表すものである。(1)と(2)の場合、文中の a、b、c などの語(形容詞、副詞など)の組み合わせ、更に and so on、or、...などを加えることで、言い替えが可能な文形式が作られているが、両者の相違は、Searle が and で複数ものをひとまとめにし、全体的な係わりで捉えるのに対して、Martinich が or を繰り返し使用することで、逆に一つ一つを切り離し、その内のどれか(一つあるいは複数)実際に意図されているものなのかを断定することができないとする点である。特に、Martinich の場合、Searle の言い替え可能な範囲の外にあるものまでも含めることのできるような形式として(2)を作り上げたと推測できようが、むしろその徹底さが無理な形式を生み出す結果になっていると思われ、その意味で、十分な分析・検討までには至っていないと言えるであろう。ともかく、(1)と(2)では、全体的な係わりとするか、それとも一つ一つ切り離すかは別にして、a、b、c などの内のどれ

が中心になるかは明らかにされず、その意味で言えば、ただ並列的に並べられているだけである。

(3)は Searle の不明瞭で、不正確な点を修正し、発展させたもので、(1)と(2)に到達するまでの Searle と Martinich のそれぞれの推論過程を説明するのに有効な一手段であると考えられる。別の言い方をすれば、(3)は文形式に置き換えられる限りにおいて、つまり全ての隠喩であれ、一部の隠喩であれ、また厳密な言い替えであれ、厳密でない言い替えであれ、文形式に言い替えられる限りにおいて、有効な手段になりえると考えられる。そうであるとすれば、言い替え不可能性を主張する Sperber and Wilson の(4)では、有効な手段として機能しないように思われるであろう。というのは、話し手の発話で使用される文 “S is P” の S と P の関係を(3)として捉え、P ()の各項の中で S ()のある特定の項と一致するか、あるいは何らかの関連を持つものがあれば、それが R となるか、あるいは R と何らかの関連を持つことになり、それにより “S is R” に到達する訳で、もし Sperber and Wilson の言うように、話し手が聞き手に伝えようとする考えが複雑で、複数の、しかも不定数の命題から構成され、その一連の命題を聞き手が心に抱くことによって話し手の考えが理解できるとするならば、一つの文で表し尽くすことができなくなり、従って “S is R” という文形式では表すことができなくなると考えられるからである。ただ、(3)は一つの文に限らず、様々な組み合わせによって不定数の文を作り出すことができるのであり、例えば、話題による様々な組み合わせで、“S is R” は、“S(s¹) is R(p¹)”、“S(s²) is R(p²)”、“S(s³) is R(p³)” などの様々な文になりえるのであり、それら不定数の文の集合 (あるいは、それぞれを命題とし、それら不定数の命題の集合)が話し手の複雑な考えであるとすることもできるであろうし、少なくとも一つの可能性として残すことができるのではなからうか。ただし、(1)と(2)は一つの文に言い替えることを意味しているのであって、不定数の文の集合を意味するのではなく、だからこそ Martinich が単一の文の中で様々な操作を行なうのであり、また(4)は今述べたようなことを意味しているのではないが。

(4)は(1)と(2)とは明らかに異なり、単一のいかなる文形式にも言い替えることができず、命題の集合として捉えるしかないことを意味する。というのは、話し手の複雑な考えを構成する一連の命題の集合が圧縮され

た形でPがあり、そのPから推論して、話し手の複雑な考えと類似するものを聞き手が組み立てる一連の命題の集合は、その内に顕著な命題と不定数の顕著でない命題を含む為、単一の文に言い替えることができないからである。また、顕著でない命題の数が不定である為、更にS { }とH { }が命題の数も各命題の内容も完全に一致しない為、話し手の複雑な考えは、たとえ複数の文によっても表し尽くされることはなく、たとえどのような文形式であっても言い替えることができないことになる。特に、話し手の複雑な考えの圧縮形であるPは、話し手の考えとは関係なしにP自体として、話し手が伝えようと意図する考えとはずれてしまうようなものまでも含意することになるが、聞き手が強い含意を核にして、それに様々な弱い含意を付け加えながら組み立てていく過程で、話し手の意図する考えとずれるような弱い含意が処理されていくことになる。ともかく、たとえ強い含意（顕著な命題）が文形式に言い替えることができて、付随する不定数の弱い含意（顕著でない命題）を切り離すことができない為、そうした弱い含意（顕著でない命題）の存在によって、隠喩は厳密な言い替えも、厳密でない言い替えもできないことになる。そこに隠喩の意味の特徴があり、隠喩を使用する理由があるとと言えるし、またそこに Sperber and Wilson の主張の説得力の強さがあると思われる。

以上述べてきたことを更に明確にする為に、まず最も標準的な隠喩的発話の例と思われる Searle の例を調べてみることにする。

(A) Sam is a giant.

(B) Sam is big.

Searleの場合、ごく単純で、「巨人」は定義上「大きい」である為、(A)を発話することで隠喩的に(B)を意味することになる。これが“S is a”という文形式の典型である。Martinich の場合はどうであろうか。多分、Searle と同様に、(B)となるであろう。“Sam is big,…”であるかもしれないが、それ程大差はないであろう。しかし、“Sam is big, or b, or c,…”であるとするれば、文中のa、b、cなどの内、どれが話し手によって意図されているものなのか断定できなくなる為、(B)よりも悪化してしまう。Sperber and Wilson の場合、(B)は(A)の強い含意であるが、もし話し手が聞き手に伝えようと考えているのが(B)だけであるのなら、初めから(A)ではなく、(B)を直接言うべきで、(A)を言う以上、強

い含意(B)以外にも弱い含意が多くあるはずである。そこで、「大きい」を伝えただけなら、何故象などの他のものを言わずに、あえて「巨人」を言ったのかの意味がはっきりせず、従って当然(A)は弱い含意も多く持っているはずであるが、聞き手はそれらの弱い含意(体格以外にも、性格、姿、行動など様々なもの)を(1)と(2)という文形式に言い替えることはできず、ただ(B)を軸にして、その回りに弱い含意を幾つも付け加えた形で、話し手の考えていることと同一ではないが、それと類似するものとして理解することになる。そこに(A)のような隠喩を言う理由があり、また(A)以外に言い表せない理由がある。というのは、もし話し手が自分の考えていることを聞き手に伝えようとして、全て(B)が強い含意であると仮定して、(A)、“Sam is an elephant”、そして“Sam is Gulliver”のそれぞれを言ったとしたら、「巨人」、「象」、そして「ガリバー」をそれぞれ使用することで、話し手の考えの内容は勿論のこと、聞き手が推論して、話し手の考えとして理解する内容もそれぞれの表現により異なってくるからである。

次に、Martinich の隠喩的発話の例を調べることにする。

(C) My love is a red rose.

(D) My love is beautiful, or sweet-smelling, or highly-valued, ...

(D1) My love is beautiful.

(D2) My love is beautiful, sweet-smelling, highly-valued, and so on.

(D3) My love is sweet-smelling.

(D4) My love is highly-valued.

Searle の場合、彼の原則 1 に従えば、(D1)になるが、むしろ彼の原則 2 に基づいて、(D2)で、“S is a, b, c, and so on” という文形式を取るようになるであろう。Martinich の場合、(C)を発話することで隠喩的に(D)を意味することになり、“S is a, or b, or c, ...” という文形式の典型となる。(D2)では、恋人が「美しい」、「甘い香りがする」、「非常に大切な」などの性質を全体的に係わり合いながら持つことを意味する訳で、その意味では、Sperber and Wilson の説明と多少類似する面があると言えるかもしれない。ただし、それらの性質の内のどれが核(強い含意)であるかが明らかにされず(上記の三つの性質が全て核になるとも受け取れるが)、また単一の文中で性質が列挙されているだけで、複数の命題にはなっていないという点が異なるが。それに対して、(D)では、「美し

い」、「甘い香りがする」、「非常に大切な」などの性質が一つ一つ切り離されて、ただ並列的に並べられているにすぎず、どの性質が話し手によって実際に意図されているものなのかが示されていない。そうした両者を比較する限りでは、様々な性質を全体的な係わりの中で捉える方がより説得力があると思われる。では、Sperber and Wilson の場合はどうなるであろうか。(C)から我々がごく普通に推論するのは、やはり恋人の美しさであろうから、(D1)が(C)の強い含意となるであろう。そうであるとすると、(D3)、(D4)などを含む不定数のものが弱い含意になる((D3)も強い含意とすることもできよう)。そうした強い含意と不定数の弱い含意を全体的な係わりの中で(前者を軸にし、それに後者を肉付けして仕上げる形で)(C)が持つ訳で、(1)と(2)のような単一の文形式に押し込めることはできなくなる。つまり、話し手が聞き手に伝えようと考えているものが、もし「美しい」だけであるならば、(D1)を直接言えばよく、またもし「美しい」、「甘い香りがする」、「非常に大切な」などの性質であれば、(D)あるいは(D2)と類似したものを直接言えばいい訳であるが、そうではなく(C)を言う以上、そこには(D1)、(D)、(D2)など以上のもの(強い含意(D1)を軸にし、それに不定数の弱い含意を肉付けして仕上げる形で、それら全体の有機的な係わりを持ったもの)が含まれているからで、そこに(C)という隠喩を言う理由があるからである。(C)を言う理由は、何故バラ以外の花ではなく、あえてバラを使用するのか、また何故赤以外の色ではなく、あえて赤いバラを使用するのかの問題に関係している。例えば、全て(D1)が強い含意であると仮定して、話し手が(C)、“My love is a white rose”、“My love is a lily”のそれぞれを聞き手に言う時、それらの表現に圧縮される話し手の考えの内容、またそれらの表現から推論して、話し手の考えとして聞き手が理解する内容は、それぞれの表現によって異なってくるし、更に話し手の考えの内容と聞き手が理解する内容の類似性における食い違い(量的にも、質的にも)も、それぞれの表現によって異なってくる訳で、あえて(C)を言うには、それなりの理由があり、別の言葉では言い替えることのできない弱い含意が不定数あるのである。

以上の二例の説明で明らかになったと思われるが、たとえ最も標準的な隠喩の例であっても、(1)と(2)では十分納得のいく説明ができず、(4)によって初めて隠喩の意味が説得力のある形で説明されると言っている

あろう。というのは、たとえ我々が不定数の弱い含意を感じ取ったとしても、例えば、バラ以外の花ではなく、また赤以外の色でもなく、あえて赤いバラを使用する(C)の不定数の弱い含意を感じ取ったとしても、それらを文に言い替えることができず、隠喩(C)以外に表現しようがないと言うしかなく、如何なる形であれ、別の言葉に言い替えれば、それらの弱い含意が表現されないまま切り捨てられてしまうので、結局隠喩の意味を理解する上で、それらの弱い含意が重要な位置を占めることになるからである。しかし、不定数の弱い含意の為に、厳密な言い替えであれ、厳密でない言い替えであれ、言い替えそのものが不可能であることを強調しすぎるのは危険であろう。例えば、“You are a lily”と言われた人が相手にその意味を問い質せば、たとえ全てを言い尽せないとしても、その相手は(1)の“S is a, b, c, and so on”という文形式で答えるであろうし、かなりの部分の弱い含意を切り捨てる形であっても、意志疎通を図ることになるであろう。また、言い替えに関する Sperber and Wilson の説明に説得力があるとしても、それがすぐに彼らの隠喩理論の妥当性を証明することにはならない。(1)、(2)、そして(4)は、それぞれの推論過程を通して到達された結果であるが、その途中の推論過程が問題となるからである。例えば、赤いバラから我々は実に様々な、無限とも言える程の性質を推論するであろうが、あるいは単に感じ取るであろうが、それら全ての性質が会話で話題になる訳ではなく、その範囲をある程度狭める必要性が出てくるであろうから、何らかの制限原則が問題になってくるし、更に赤いバラの性質を推論する時、あるいは単に感じ取る時、赤いバラ(赤とバラ)に対する我々の信念も様々であろうから、信念が問題になってくるという具合に。ともかく、隠喩理論全体を考える時、Searle と Martinich の主張も無視できないであろう。

結　　び

最近の語用論の流れの中で中心的な位置を占める言語行為論、含意理論、そして関連性理論に結び付く語用論的隠喩理論である Searle の隠喩理論、Martinich の隠喩理論、そして Sperber and Wilson の隠喩理論をそれぞれ彼らの主張になるべく沿った形で解釈・検討し、更にそれらを比較・検討してきたが、推論過程に関する Searle の曖昧な点を取り除き、より徹底した形で一貫性を持たせた Martinich の隠喩理論には、か

なり無理と思われる主張が見られたし、また Searle が明確に結論を出さなかった言い替えの問題に対して、新たな視点から積極的に取り組み、説得力のある説明を行なった Sperber and Wilson の隠喩理論には、推論過程の捉え方に不十分さが見られた。勿論、彼らの隠喩理論を正確に評価する為には、彼らが拠り所にする言語行為論、含意理論、そして関連性理論そのものを正確に評価しなければならないが、ここでは Searle と Martinich による隠喩的発話の見分け方、Searle の主張を修正・発展させた推論過程、Sperber and Wilson の言い替えなどが、隠喩の問題に取り組む際の重要な助けになるとだけ述べて終えることにする。

注

(26) Dan Sperber and Deirdre Wilson, "Loose Talk," in Steven Davis(ed.), *Pragmatics* (New York:Oxford University Press,1991), p.542.

使用文献

- Austin, J.L. (1962). *How to Do Things with Words* (Oxford: Clarendon Press).
- Black, Max (1954). "Metaphor," in Max Black(ed.), *Models and Metaphors* (New York: Cornell University Press).
- Blakemore, Diane (1992). *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics* (Oxford, England: Basil Blackwell).
- Green, G.M. (1989). *Pragmatics and Natural Language Understanding* (New Jersey: Lawrence Erlbaum).
- Grice, H.P. (1975). "Logic and Conversation," in P. Cole and J.L. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics*, Vol.3, *Speech Acts* (New York: Academic Press), pp.41-58.
- Grice, H.P. (1978). "Further Notes on Logic and Conversation," in P. Cole(ed.), *Syntax and Semantics*, Vol.9, *Pragmatics* (New York: Academic Press), pp.113-127.
- Leech, G.N. (1983). *Principles of Pragmatics* (London: Longman).
- Levinson, S.C. (1983). *Pragmatics* (Cambridge, England: Cambridge University Press).
- Martinich, A.P. (1984). "A Theory for Metaphor," *Journal of Literary Semantics* 13: pp.35-56. Reprinted in Steven Davis(ed.), *Pragmatics* (New York: Oxford University Press, 1991), pp.507-518.
- Miller, G.A. (1979). "Image and Models, Similes and Metaphors," in Andrew Ortony (ed.), *Metaphor and Thought* (New York: Cambridge University Press), pp.202-250.
- Searle, John R. (1969). *Speech Acts* (Cambridge, England: Cambridge

University Press).

- Searle, John R. (1974-1975). "Logical Status of Fictional Discourse," *New Literary History*, Vol. vi: pp.319-332. Reprinted in John R. Searle, *Expression and Meaning* (Cambridge, England: Cambridge University Press, 1979), pp.58-75.
- Searle, John R. (1975). "Indirect Speech Acts," in P.Cole and J.L.Morgan (eds.), *Syntax and Semantics*, Vol.3, Speech Acts, pp.59-82.
- Searle, John R. (1978). "Literal Meaning," *Erkenntnis*, Vol.13: pp. 207-224. Reprinted in John R. Searle, *Expression and Meaning*, pp. 117-136.
- Searle, John R. (1979). "Metaphor," in Andrew Ortony (ed.), *Metaphor and Thought*. Reprinted in Steven Davis(ed.), *Pragmatics*, pp. 519-538.
- Sperber, Dan, and Wilson, Deirdre (1985-1986). "Loose Talk," *Proceedings of Aristotelian Society* 86: pp.153-171. Reprinted in Steven Davis(ed.), *Pragmatics*, pp.540-549.
- Sperber, Dan, and Wilson, Deirdre (1986). *Relevance: Communication and Cognition* (Oxford, England: Basil Blackwell).

使用邦訳文献

- J.L.オースティン著、坂本百大訳『言語と行為』大修館書店 (1978年7月1日)
- G.M.グリーン著、深田淳訳『プラグマティックスとは何か一語用論概説』産業図書 (1990年10月26日)
- G.N.リーチ著、池上嘉彦・河上誓作訳『語用論』紀伊国屋書店 (1987年2月15日)
- S.C.レヴィンソン著、安井稔・奥田夏子訳『英語語用論』研究社出版 (1990年6月25日)
- J.R.サール著、坂本百大・土屋俊訳『言語行為』勁草書房 (1986年4月20日)